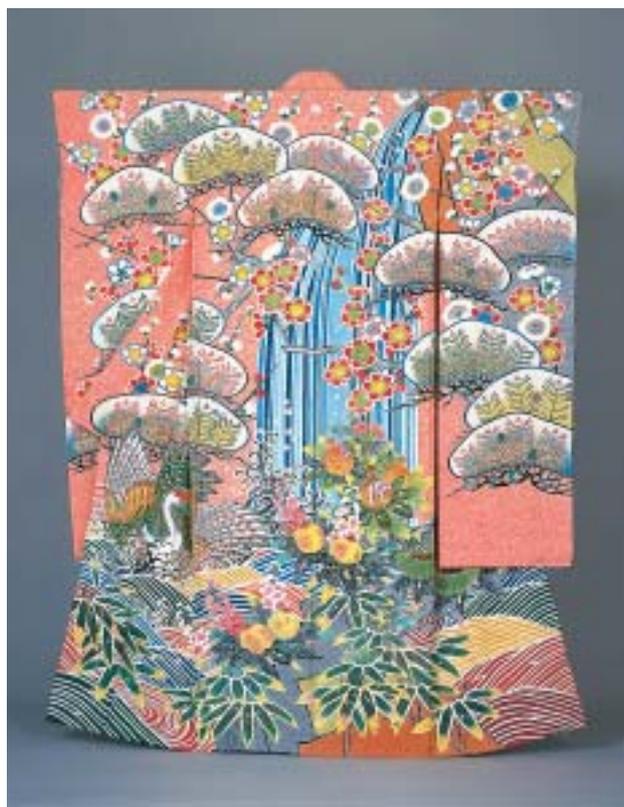


石川県立美術館だより

平成17年1月1日発行 第255号

明けましておめでとうございます
本年もよろしくお願いいいたします



友禅本振袖「瑞祥鶴浴文」 羽田登喜男



紅襲(桜かさね) 志村ふくみ

新春を寿ぐ

きものの美

いろ ^{わさ} 彩をまとう匠を着る

1月4日(火)~30日(日) 会期中無休 午前9時30分~午後5時 入館は午後4時30分まで)

目次

新年のご挨拶	2	常設展示室 主な展示作品	6
きものの美	3	展覧会回顧(没後30年 香月泰男展).....	6
加賀藩前田家伝来・能面と能装束・	4	ミュージアムレポート、1月の行事案内 ...	7
万国博覧会の世紀(前期)・明治の工芸・ ...	5	所蔵品紹介、次回の展覧会	8
書の世界・さまざまな形象・風雅の筆あと・ ...	5	ミュージアムショップ通信	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>



新年のご挨拶

地域社会における公立美術館の役割

当館館長 嶋崎 丞

あけましておめでとごございます。本年も昨年と同様に当館の活動に対して、ご援助ご協力を賜りますようお願い申し上げます。さてこの近年、地域社会の中における美術館や博物館の役割や在り方について、新聞をはじめとするマスコミの間でいろいろと論評が行われるようになってきました。それは、美術館や博物館が、存在する地域の人々に対して、どれだけの役割を果たしているかについて、根本的に考え直す時期に来ているということではないかと思われまふ。

こうしたことが大きく問われる要因を考えてみますと、それは市民生活の大きな変化が影響していると思われまふ。日本社会は高度経済成長期を経て、生活内容が随分と変化してきました。ほとんどの家庭では大型耐久消費財が普及して豊かになり、これからは物に関するよりも、健康、福祉、文化、教養、情報、サービス、娯楽などといった人に関する分野に目が向けられるようになり、事実、経済投資も行われるようになってきました。人々は、物心両面で豊かな生活を送ろうとすると、家庭内は一応不自由しくなくなり、家庭外に目を向けると、地域社会はまだ不備が多いことに気づきはじめ、地域社会づくりに関心を持つようになってきました。人々の意識は大きく変わり、地域づくりについても行政任せから、地域住民が参加して地域づくりを行う方向へと変わり始めています。当然、美術館や博物館も例外ではなく、地域づくりの重要な文化の拠点として、人々の熱い関心を集めるようになってきました。

美術館や博物館を地域づくり文化の拠点として位置付けてくると、それらを活かすための資源が何であるかをいうことが次の問題となつてきます。それはその地域における伝統文化や自然環境、ひいてはその地域における生活文化全体がその対象となつてきます。美術館や博

物館はそうした資源の中から何を選択して活かしていくかが重要な課題となつてきます。当館はそうした意味で、設立以来、石川県の芸術的個性である伝統文化としての伝統工芸を運営の柱に据え、「地方色豊かな美術館づくり」を目指して活動してきました。ある意味では今日的な在り方を早くから実施してきたということが出来ます。

本来公立美術館は、地方自治体の支えによってその地域に住む人々の文化水準を高めるために設置されたもので、その地域の文化的象徴であり、地域文化を守り、そして次世代にそれらを伝えて新しい文化を創造するための力となるものでなければなりません。それはたまたま観光の役割を果たすなど、地域の活性化につながることはありますが、それがすべてでないことはいまもありません。ましてや各地で開催される文化的イベントやテーマパークなどと同列に論ぜられるものではなく、一貫した文化政策の中に位置づけられるものであることを忘れてはなりません。

先述しましたように、美術館の活動には今後地域の人々に数多く参加していただく、私共いろいろな注文を出していただく必要を強く感じています。私共職員も、講座や列品解説をできるだけ開催し、参加していただく方々と触れ合う機会を数多く持ちたいと思つています。また、作品鑑賞の一助になるといふことで、音声ガイドを無料で貸し出し、利用していただいています。昨年からはキッズプログラム鑑賞講座を開催し、子供たちが美術館の所蔵品をインターネット上から選択して展示会を構成する参加型の活動も開始し、参加した子供たち、先生方、保護者からも大変好評を博しました。本年からはこうしたことを含めて教育活動に力を注いで参りたいと思つていきます。皆様方のご来館を心からお待ちしています。

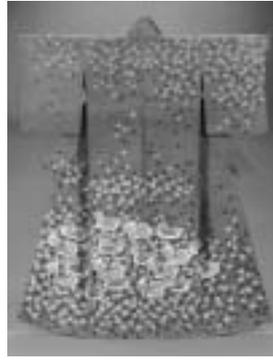
企画展示室(第7~9展示室)

新春を寿ぐ

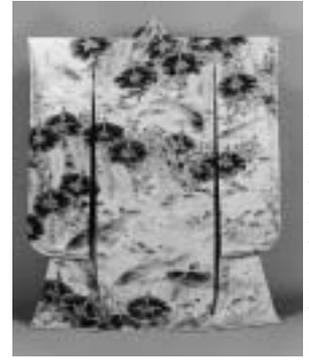
きもの美

いろ 彩をまとう 匠をを着る わざ

1月4日(火)~30日(日)会期中無休



友禅訪問着「群鷺錦秋」
羽田登喜男



友禅游魚模様振袖 木村雨山

きものは、素材そのものの美しさを生かした、日本の伝統衣装です。日本の染織技術の発達は、きものがその一端を担っていたとも言えるでしょう。

平面の布を縫いあわせたものを、帯などを用い、着る人の身体に合わせて着用するきものに対して、ほとんどの西洋の衣装は、人体の形に沿って立体的に仕立てるものです。西洋の文明が、自然と闘い、支配しようというスタンスであることに対し、東洋は自然と調和していくという傾向にあります。こうした文化的違いについて述べられることを、象徴する衣装であるとも言えます。

本展は六〇点の作品を四つの項目に分けて展示し、さまざまな作家や技法・素材のきものを紹介することで、きものかたちや色・意匠など、様々な点からその魅力を探り、日本の伝統衣装の美しさを再確認するものです。

重要無形文化財保持者たちによる、すばらしい技術を用いた作品をはじめとする出品作の数々は、あまりきものを着ないという方々にも、普段からきものに親しんでいる方々にも、新鮮な感動を呼び起こすものばかりです。この展覧会を開催することで、失われつつある伝統の一つをより多くの人々に紹介し、こうした伝統を継承する一端を担うことが出来れば幸いです。

会期中、きものを着てこ来館の方には、観覧料を団体料金に割引しますので、新春の折、きものを着て外出された際には、ぜひとも鑑賞にお立ち寄り下さい。

主な展示作品(＊印の作家は重要無形文化財保持者)
1. 継承する意匠

江戸時代後期の作品と、昭和前期の作家たちによる、伝統を受け継ぎながら独自の創作への萌芽を感じさせる世界。

友禅染木綿地鳳凰麒麟文羽織

友禅游魚模様振袖 木村雨山＊ (当館蔵)
友禅赤茶地鶏落葉文訪問着「暁声」 上野為一＊ (当館蔵)

2. 構築する意匠
二次元的な描く模様ではない、織などによる構築的、三次元的意匠の作品

藍地縞に丸文様絁着物 宗廣力三＊ (岐阜県美術館蔵)
四ツ目菱文羅着物 北村武資＊ (京都国立近代美術館蔵)
繡箔銀杏七宝文訪問着 福田喜重＊ (式年遷宮記念神宮美術館蔵)

3. 反復する意匠

小紋や中形などの型紙による連続模様の作品
江戸小紋着物「老松」 小宮康孝＊ (当館蔵)
長板中形「水に鯉」 松原定吉＊ (富山県水墨美術館蔵)
柄分一本縞付下 中儀延 (当館蔵)

4. モダンズムの意匠
最もダイレクトに美術における近代化の影響を受けた、華麗な友禅の作品

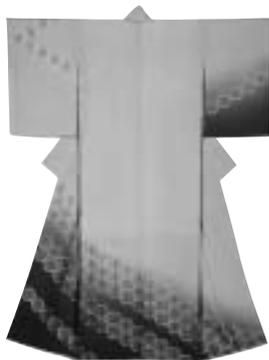
友禅訪問着「群鷺錦秋」 羽田登喜男＊ (当館蔵)
友禅訪問着「華苑文様」 森口華弘＊ (当館蔵)
友禅着物「雨あし」 二塚長生

観覧料

個人		団体(20名以上)		
一般	600円	一般	500円	
大学生	400円	大学生	300円	
高校生以下	200円	高校生以下	100円	

きものを着てこ来場の方は、観覧料が団体割引になります。

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金になります。



繡箔銀杏七宝文訪問着 福田喜重



友禅着物「雨あし」 二塚長生



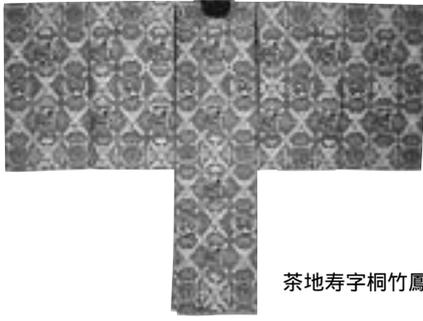
藍地縞に丸文様絁着物 宗廣力三

常設展示室(前田育徳会・第2展示室)

特別陳列

能面と能装束

1月4日(火)~30日(日) 会期中無休



茶地寿字桐竹鳳凰模様錦翁狩衣

本館では毎年一回、前田育徳会展示室と第2展示室において、加賀藩前田家伝来の能面と能装束の展示を行っています。今回は「特別陳列」として、県内の寺社や関西の博物館に所蔵される作品も借用し、全四十七点を紹介します。ここでは、そのうち能装束二点を紹介し、能装束の見所から制作背景まで探ってみましょう。

彦根城博物館が所蔵する「茶地寿字桐竹鳳凰模様錦翁狩衣」は、蜀江模様を真似た竹の筋交に「壽」の文字と鳳凰の丸紋を配するという、大変珍しい図柄の狩衣です。翁専用の装束にふさわしい福寿性に加え、遊戯性も備えています。さて、本狩衣の畳紙には、次のように記されています。

います。

天保十四年十一月廿六日 御前御三十三之御祝有之候節段ノ翁御狩衣ノ茶地鳳凰の丸壽之字筋違竹格子等ノ真龍院様大森三郎兵衛被仰付被進之ノ但宝生太夫方二有之候形

(天保十四年十一月二十六日に、加賀藩第十三代藩主前田斉泰の三十三歳を祝して、十二代藩主斉広の正室の真龍院様より京都の御用商人の大森三郎兵衛へ仰せ付けられ進呈されたものである。)

前田斉泰は、歴代藩主の中でも特に能を好んだ藩主として知られ、自ら演じることを得意としました。藩士に観覧させたことはもちろん、「子慶寧の成婚を祝って」「生母米操院の遷厝を祝って」といった身内の慶事に際してもしばしば演能を催しており、能を通して「前田家の繁栄」を強く願ったことがうかがえます。真龍院を招いての演能の多さも目立ち、「遷厝を祝って」「住まいを二の

丸へ移したことを祝って」それを催し、斉広が没した後も長く生きた真龍院に対する細やかな心配りを怠りませんでした。こうした斉泰の配慮に対する返礼でしょうか、真龍院から贈られた能装束はしばしば散見でき、本狩衣は中でも白眉の一領です。

天保十四年に三十三歳を迎えた斉泰でしたが、前年より脚氣を患い、それは江戸への参勤の延期を願い出るほどの重症でした。能好きの斉泰は、能を舞うことで少しずつ手足を動かすよう心がけ、治癒を試みたといいますが、本狩衣には、一日も早い完治を願う真龍院の思いもあつたに違いありません。

続いて、前田育徳会が所蔵する「花色地福包に戻り笛振太鼓模様舞衣」を紹介しましょう。舞衣は、絹地に金糸で模様が織り出された広袖物で、美しい舞を見せます。本舞衣には両袖と背中にも福包模様が、裾には笛やふり太鼓模様が配されています。本舞衣には次のような畳紙が付されています。

御舞衣ノ御地花色御模様福包二ツ戻り笛二袋ふり太鼓ノ安政五年 御前有卦付従寿正院様被上候

(安政五年、斉泰が有卦に入ったことを祝って、斉泰の異母妹の寿正院様より上げられたものである。)

勇(寿正院)は大聖寺十代藩主利極に嫁いだものの、利極は早世。その後を継いだ利平・利行(斉泰五男)共に早世し、大聖寺藩は安政二年に利隆(斉泰七男)が継いだことよって、ようやく安定します。この間、大聖寺藩の行く末に苦慮

した斉泰でしたが、こうした経緯を考えると、寿正院の斉泰に対する感謝の思いは並々ならぬものであつたとうかがえます。

同年の十二月二日、斉泰の有卦を祝って能が催されています。この日の番組は 右近 元服曾我 井筒 鉢木 飛雲 松虫 須磨源氏附祝言 でしたが、これらの能曲の頭文字を取ると「うけいはひます(有卦祝います)」となります。斉泰はしばしばこうした遊び心に満ちた番組を立てて楽しみました。寿正院より贈られた本舞衣はこの日の 右近 にて披露されたのでしよう。斉泰は贈られた裂によって仕立てた装束の披露も心得ており、こうした斉泰の心配りが一層贈り主を喜ばせ、めずらしい裂があると、再び斉泰の元へ贈られたと推測できます。

伝存する加賀藩前田家伝来の能装束は、ほとんど斉広・斉泰の時期に仕立てられたと思われる。本特別陳列では、装束が仕立てられた背景も踏まえながら、「加賀宝生」の栄華の一端を紹介します。



花色地福包に戻り笛振太鼓模様舞衣 前田育徳会蔵

常設展示室 (第5展示室)

特集

万国博覧会の世紀(前期)

明治の工芸

1月4日(火)~30日(日)前期

2月3日(木)~3月27日(日)後期



南天図硯箱 初代笹田月暁

今年、二〇〇五年日本国際博覧会いわゆる愛知万博が三月から九月にかけて開催されます。昨年はそれを記念して「世紀の祭典 万国博覧会の美術」展が東京、大阪で開催され一月から名古屋に巡回します。日本と万国博覧会の関わりは、慶応三年(一八六七)、パリ万博に江戸幕府と薩摩・佐賀両藩が参加したことからは始まり、明治六年(一八七三)のウイン万博に初めて国として参加し、江戸時代以来の優れた技に支えられた工芸品によって世界を魅了しました。

明治維新は政治的にも、社会的にも、また経済的にも激変をもたらし、旧来のパトロンを失った工芸職人たちは一時窮乏にさらされましたが、石川県は国策としてとられた殖産興業の施策にいち早く反応し、明治五年(一八七二)には金沢博覧会の開催、以後石川勸業場の設置、金沢銅器会社の設立、金沢工業高校の開校など藩政時代以来の伝統工芸の復興発展に努力した結果、多くの優れた工芸家を生み出しました。

当館には旧美術館以来、この時代の作品が多数収蔵されています。しかし、輸出仕様の装飾過剰とでも言うべきものが主流で、これまであまり評価が高くありませんでした。しかし、近年の万国博覧会の時代再検証の風潮とあいまって、高度の技術が駆使されたことで世界の注目を集め、西洋の工芸界に大きな影響を与えたといわれている明治の工芸、陶芸では九谷庄三、春名繁春、宮川香山、漆工の大垣昌訓、笹田月暁、米田孫六、金工の水野源六、山尾次吉、米沢弘正など二十四作家、それに九谷陶器会社、銅器会社の製品など三十四点を特集展示し、その魅力を紹介いたします。

また近代九谷の原点となった古九谷も合わせて展示いたしますので是非ご覧ください。

例年一月には書の作品をご覧いただいておりますが、今回は「書の世界」さまざまな形象・風雅の筆あと」と題した展示を行います。館藏品の中から、古典的な手法で書かれた作品、前衛的な手法で書かれた作品という大きく2つに分けたかたちでご覧いただきたいと思えます。

わが国において書は、長い歴史とともに発展してきました。平安時代の三筆、三蹟はつとに有名ですが、その後も鎌倉後期や江戸初期には、それに匹敵するような書家も現れています。現代日本の書はこれまでの伝統的な美を継承しながらさらに、新しい美を追究しつづけています。

漢詩文や万葉、古今の和歌を題材にし、手法ともに古典の伝統を守っている作品は、漢字も古文体や篆書体を用いられ、仮名も変体仮名が用いられています。中田幸子の「雪月花」は、流れるような文字のフォルムが美しく、繊細で優美な雰囲気を出しています。

美を追究し続ける前衛書の代表的な作品としては、表立雲の「煌めきの時A」があげられます。墨を使わずアクリル絵の具を使い絵画的な手法で表現され、見る側に不思議な感動を与えます。また、余白との間合いを計算し、文字を造形的に構成している作品もあります。手島右卿の「飛」は、墨を自在に操り、にじみ、刷毛目を生かした技法を用いており、まるで雄飛するような作者の気迫が伝わってくるようです。

主な展示作品

独嘯	青山 杉雨
万葉歌	大石 隆子
煌めきの時A	表 立雲
飛	手島 右卿
雪月花	中田 幸子
五言一句	横西 霞亭



飛 手島右卿

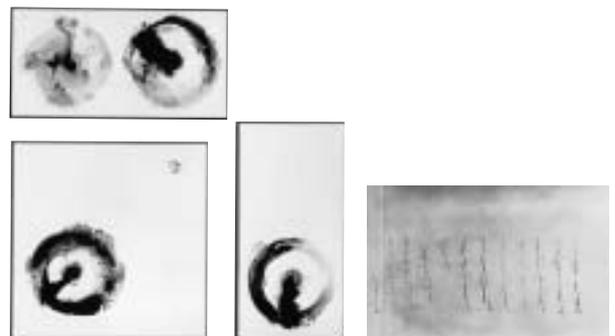
常設展示室 (第6展示室)

特集

書の世界

さまざまな形象・風雅の筆あと

1月4日(火)~30日(日)



煌めきの時A 表 立雲 雪月花 中田幸子

常設展示室

主な展示作品

1月4日(火)~30日(日)

●=国宝 =重要文化財
=石川県指定文化財 =金沢市指定文化財

前田育徳会・第2展示室

特別陳列 加賀藩前田家伝来 能面と能装束
悪尉(淡吹きの面) 尾山神社蔵
赤地寄縞金織丸紋亀甲草花模様厚板唐織 前田育徳会蔵
花色地色絵花唐船模様縫箔 前田育徳会蔵
紫地巻物筆源氏車模様長絹 野村美術館蔵

第1展示室

●色絵雉香炉
色絵雌雉香炉 野々村仁清
野々村仁清
野々村仁清

第3・4展示室(油彩画・彫塑)

立つ 小倉尚子
群がる 鴨居 玲
牧歌 宮本三郎
彫塑 川岸要吉
雨あがり 木村桂二
或る男

第5展示室(古九谷・工芸)

色絵鶴かるた文平鉢 古九谷
色絵鳳凰図平鉢 古九谷
陶磁 九谷庄三
漆工 初代笹田月暁
蒔絵南天図硯箱 八代水野源六
金工 八代水野源六
金銀象嵌雪に鷹図香炉

第6展示室(書・日本画)

特集 書の世界 ささまざまな形象・風雅の筆あと
5ページをご覧ください。
日本画 上田珪草
鳥骨鶏 百々俊雅
日曜日 安田鞞彦
飛鳥をとめ
観覧料



左右
●色絵雄香炉
色絵雌香炉

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



日曜日 百々俊雅



或る男 木村桂二



立つ 小倉尚子

展覧会回顧

没後30年香月泰男展

<私の>シベリア、そして<私の>地球



香月泰男の作品と資料を200点あまりも見るといことは、本県では初めてのことでした。シベリア・シリーズと私の地球、この暗と明、対極にある作品群をご覧になって、後者の穏やかでユーモラスな台所シリーズや晩年の三隅町の風物や親子をテーマとした作品を好まれた方も多かったと思います。

香月といえば暗く重い『シベリア・シリーズ』という固定観念があるものですから、こんな世界も描いていたのかとちょっと驚きでした。ことに、出不精の香月に奥様がさりげなくキッチンテーブルに蛸やハムなどを置いて、口に

はされずに、『これを描いたら』と暗示して生まれたという台所シリーズは、カラフルで意外な取り合わせの妙がうかがえる作品たちでした。

でも、やはり圧巻は全57作のシベリア・シリーズを一堂に見ることができたことでしょう。講演会で立花隆氏が全長60メートルの絵巻物と称されていましたが、香月が作品一つ一つに付けた詞書きを読みながら、作品を見るという行為は、通常の油絵の鑑賞とは異なる世界を確かに生んでいました。

普通、絵の鑑賞は見る側の思いが作者の思いから逸脱することをかなりの範囲で許容しています。あるいは見る側が作品に意義を付与し続け、作者の当初の意図を越えて作品を完成させることすらあります。しかし、香月は詞書き(=解説)を付け、あくまでも香月自身の体験に添って絵を見ることを求めるのです。初めはそれに抵抗を感じたのですが、私たちにとって想像することもできない世界が描かれた作品を見る時、それはやはり必要なのだと、日々見続けているうちに感じたのでした。

(二木伸一郎 学芸専門員)

ミュージアム レポート

キッズ 鑑賞講座

10月9日(土)「秋の優品選」



春よりキッズ プログラムと題して、小学生を対象に常設展示室を使用している鑑賞講座と体験講座を開講しております。今回は「秋の優品選」です。

毎回さまざまなジャンルに挑戦しているわけですが、今回は、お待たせしましたと言いますか、国宝の色絵雉香炉を中心に鑑賞を進めました。パネルで内部のつくり等を知った後、ミニチュア版で確認し、展示室での鑑賞となりました。

美しい雉香炉を前に、踏み台に登り、上から横から、そしてかがんで下からと、講義室での話しを思い出しながら、自分の納得いくまで鑑賞し、「羽根にはとてもきれいな色がたくさん使われている」「堂々としている姿が凄い」等と自分の感想を述べる小学生達に、数回のプログラムを経て、作品をみることの楽しさを逆に教えてもらった今回の講座でした。

11月13日(土)「彫刻家 清水良治」

キッズ 鑑賞講座の第5回目は、盛り沢山の内容でした。彫塑をテーマに、彫る「彫刻」と粘土でつくる「塑造」を比べてみました。金属、木、石膏、プラスチック、乾漆など、材質による見た目と手触りの違いに子どもたちは驚きの様子でした。「子供群像」という大勢の子どもたちが遊んだり、転げたりしている像の石膏からブロンズにする時の型があって、同じ形のもを仕上げる方法や仕組みが不思議なようで、型の構造や材質にも関心が高かったようです。そのあと「彫刻家 清水良治展」を鑑賞しました。「同じかたち」を探そうというクイズに、会場中の一点一点を熱心に見て回る姿が印象的でした。ちょうどこの日は、1階で七尾市立朝日中学校の生徒の監修による「マイ・ミュージアム」が開かれており、生徒らによるジュニアガイドにも参加しました。年齢に近い中学生の解説は子どもたちには身近に感じたようです。



今回の鑑賞講座は2月5日(土)「万国博覧会の世紀 明治の工芸」です。この機会に私たちとたくさんの美術に親しみましょう。

ギャラリートーク

10月23日(土)「秋の優品選」

10月9日、広坂に、現代美術を中心とした金沢21世紀美術館がオープンしました。当館は、古美術から近・現代美術、主として石川県にゆかりのある作品を中心に展示して



きましたが、今回は、「秋の優品選」として当館を代表する作品を主に特集展示しました。ギャラリー・トークは主に育徳会展示室と第2展示室を中心に行いました。育徳会展示室では、重要文化財「アエネアス物語図毛綴壁掛」を今、映画で話題になっているトロイ戦争をからめて解説すると興味深く聞いていました。第2展示室では、県文化財に指定されている「盛上菊図」と喜多川相説の「秋草図」が展示されているので、加賀藩と琳派の関係をを中心に解説し、加賀文化の特質を理解いただいたように思われます。

11月20日(土)「彫刻家 清水良治」

トークに先立ちロビーで、彫像・塑像の違い、制作工程からブロンズ完成までをお話し、展示室では、個々の作品を解説するのではなく、なぜこのような作品が生まれたのかを考えてみました。故郷の地域の風習、思想や文学作品の中から影響を受け、現代社会からの触発が制作原点となっていることを説明しながら、石膏直付けからのブロンズが数多く生み出された作家の思いを参加者共々鑑賞することが出来ました。



参加者からは、必要以外のものがそぎ落され、説明的な造形が省かれた作品が多いのは、確実なデッサンから裏付けられているからではないか。また、足が何本もつくられたものもあり、従来の彫刻では考えられない、絵画的でありながら不自然でなくかえって新鮮だとの意見も聞かれました。少数の参加者でしたが、彫刻を鑑賞する楽しい集まりとなりました。

1月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
1/8(土)	美術講座	能面と能装束 鑑賞のための基礎講座 (村上尚子 学芸員)	講義室
1/9(日)	月例映画会	絢に生きる - 宗廣力三 - (32分) 彩なす首里の織物 - 宮平初子 - (40分)	ホール
1/15(土)	ギャラリー・トーク	加賀藩前田家伝来 - 能面と能装束 - (村上尚子 学芸員) 展示室内で行われるため、常設展示の入場料金が必要です。	常設展示室
1/16(日)	ビデオ鑑賞会	国宝12 中尊寺金色堂・富貴寺大堂・浄土寺浄土堂 (34分)	ホール
1/22(土)	美術講座	尾形光琳 作為の美学 (村瀬博春 学芸主査)	講義室
1/23(日)	月例映画会	山田貢の友禅 凧 (34分) 羅 北村武資のわざ (33分)	ホール
1/29(土)	美術講座	日本の金工 (南 俊英 学芸第一課長)	講義室
1/30(日)	ビデオ鑑賞会	国宝13 源氏物語絵巻 (37分)	ホール

1月の全館休館日は1日(土)~3日(月)・31日(月)です。

いろ え きんさい かちょうもんおおごうろ
色絵金彩花鳥文大香炉

九谷庄三 文化13年～明治16年(1816～1883)

明治11年(1878)

口径22.3 胴径42.3 高32.6(cm)



九谷庄三は、文化13年(1816)能美郡寺井村(現寺井町)の農家に生まれ、幼名を庄七といたしました。文政9年(1826)十一才の時、若杉窯に入り、名工赤絵勇次郎に師事、非凡な才能と旺盛な研究心から、天保3年(1832)には小野窯に陶画工として招かれました。また、能登の梨谷小山焼や越中の丸山焼へ陶技に指導にいったとも伝えられています。天保12年(1841)26才の時に寺井に帰り、独立して工房を開き、名前も庄三と改めます。

明治維新前後、日本に入ってきた洋絵具を上絵付に応用し、従来の和絵具と金彩を併用した多彩かつ繊細な「彩色金襴」の技法を確立します。この作風が、当時、海外での万国博覧会で高い評価を受け、「ジャパネクタニ」と称されて大量に輸

出されるなど、明治期の産業九谷焼の隆盛に大きな役割を果たします。

この作品は、蓋上部に宝珠形の鈕がつき、その周りを龍が取り巻きます。また、身は胴が大きく張り出し、底には竹を三本束ねた脚が三方につく豪華華麗な大香炉となっています。全体は赤地に牡丹唐草を中心とした金襴手とし、蓋や身の胴部分に大小の円形窓を割り文様として抜き、その中に中国風の花鳥・草花を精細な筆法で巧みに描くなど、庄三特有の彩色金襴の技法を駆使した華やかで堂々たる風格は、庄三晩年の代表作としてよく知られています。また、作品底面には、「明治11年 九谷庄三製 行年63歳」と書かれるなど資料としても貴重です。

第5展示室で展示中

ミュージアムショップ通信

新年明けましておめでとうございます！今年もよろしくお願いたします。企画展「きものの美 新春を寿ぐ」は、日本の歴史と伝統を踏まえた、新春にふさわしいテーマの着物を紹介しています。優美で雅な輝きを放つ作品を、是非ご堪能ください。

さて、今年の干支は酉です。鳥といえば、当館には国宝 色絵雉香炉と重文 色絵雌雉香炉がございます。京焼の祖といわれる野々村仁清の作で、羽毛など美しく彩った豪華な作品です。めでたく、今年のJAL(日本航空)のアート・カレンダー、1月のページに取り上げられました。このカレンダーは、国内向け40万部と海外向け4カ国語対応6万部が制作されていますので、いろんなところで雉香炉を見ることができるのではないのでしょうか。当館にとって、今年は世界に羽ばたく(大きく飛躍する)実り多き年になるのかもしれない。

ショップでお求めいただけます。



2005年版 JAL アートカレンダー(1,500円)

次回の展覧会

特集 茶道美術名品展

(前田育徳会・第2展示室)

特集 万国博覧会の世紀(後期)

- 明治の工芸 -

(第5展示室)

2月3日(木)～27日(日)

休館日：1月1日(土)～3日(月)31日(月)

石川県立美術館だより 第255号

2005年1月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>